

新編

國語讀本

高等小學校
兒童用

卷二

T1A3

10

Ko97k

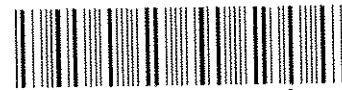
明治三十四年八月十六日
高等小學校國語教科用兒童
文部省檢定濟

小山左文二
武島又次郎合著

新編
國語讀本
高等小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

圖書 和圖書 週



a 1380328093 a

福岡教育大学蔵書

新編
國語讀本
高等小學校
兒童用
卷二 目次

第十一課	紫式部	三十五
第十課	女子のたしなみ	三十二
第九課	果物	二十八
第八課	秋の野山	二十五
第七課	わが母	二十一
第六課	世わたる業	十七
第五課	苗木を註文す	十五
第四課	木曾の谷	十一
第三課	宇治川ノ先陣	七
第二課	近江八景	三
第一課	我等の郷土	一

新編國語讀本 卷二 高等用目次

第十二課	松のみさを	四十
第十三課	宮崎安貞	四十一
第十四課	名取彦兵衛	四十四
第十五課	買物を頼む	四十七
第十六課	獅子と兄弟 (一)	五十
第十七課	獅子と兄弟 (二)	五十五
第十八課	扇ノマト	六十一
第十九課	英主海神を叱す	六十四
第二十課	寓言三題	六十九
第二十一課	昔の旅と今の旅	七十三
第二十二課	美しき天然	七十六

新編 國語讀本 高等小學校 兒童用 卷二

第一課 我等の郷土

我等の郷土は、我等の生れたる地にして、
父母のいますところ、親戚・朋友のあるところ、
また、先祖代々の墓の存するところなり。
我等は、この郷土の開けたる次第や、名所の
由來、舊跡の由來や、この地より出てし名高き人の
事跡などを聞きて、ますます、我等の郷土
のよきところなるを知りたり。

我等は、また、この郷土の、年ごとに、交通も^{生徒}便利となり、産物も増加し、學校生徒も多くなるを見て、この郷土を愛する念、いよいよ、深くなりたり。

我等は、この後、ますます、おのれの智徳をみがき、この郷土の良民となりて、この地の繁榮をはからんと欲す。

また、たとひ、故ありて、他郷にうつり住むことありとも、しばらくも、この郷土をわす

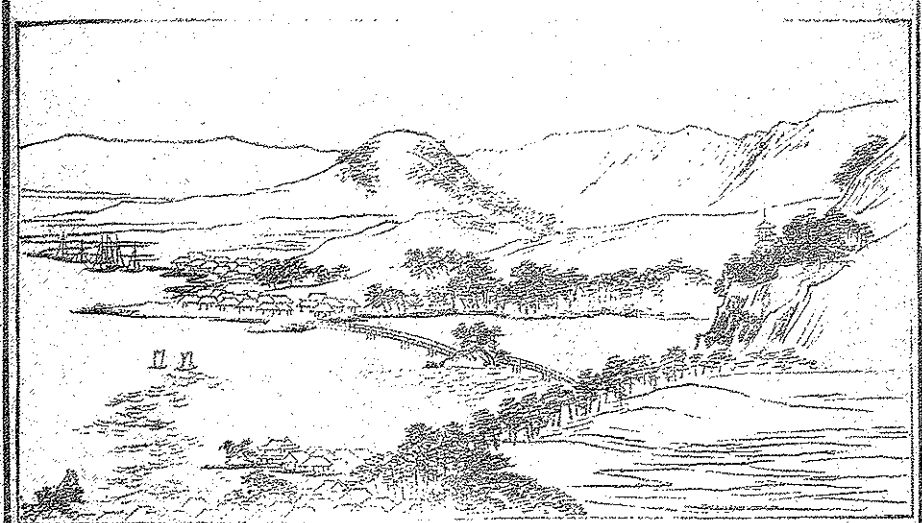
るることなく、ながく、この地のために、力をつくさんと思ふなり。

第二課 近江八景

近江國琵琶湖のあたりは、實に、景色のよい處である。中でも、唐崎、比良、峰、石山寺、三井寺、堅田、矢走、栗津、勢多の景色は、また、別段である。これを近江八景といふ。

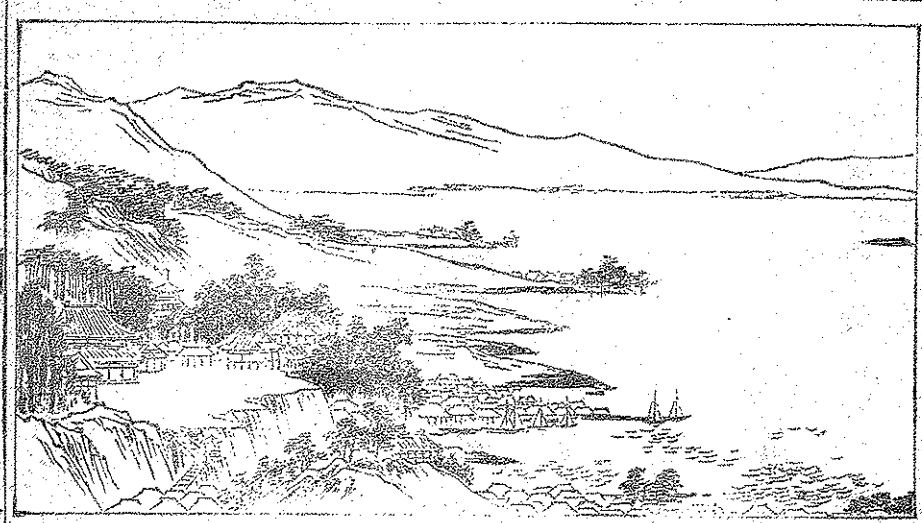
矢走は、船の出入が多い處である。その西の勢多川にかかつてゐるのは、いはゆる勢

境内。



多のから橋である。橋を渡って、左へゆくと、石山寺がある。その境内には、大きな黒い岩が、いくつも立って居る。ここは、秋の夜、月を見るによい處である。石山寺から勢多にかへり、栗津に出ると、昔、木曾義仲（ミナモトノヨシナガ）の討死した

街道。



處がある。この邊の街道には、松が立ちならんでゐて、さーさーと吹く風の音が、まことに心よい。栗津から大津をとほって、西へゆくと、山腹に、三井寺がある。この寺の境内は、大と一廣くて、ここかしこに、いくつも、お

堂がたつてゐる。大分高い處であるから、湖水が一目に見える。山を下ると、湖水の水を京都へ引く入口がある。

岸にとうて、北の方へゆくと、唐崎が、湖中に突き出てゐる。そこに、一本の大きな松が、枝を廣げて、湖上にかぶさつてゐる。

その北に高い山がある。それが、比良峰である。この山の雪景色は、なかなかよい。その下に、船つきの處がある。それが堅田で、湖水

の中に觀音堂があつて、岸から橋をかけてある。このお堂は、遠くから見ると、水に浮いてゐるよゝであるから、浮御堂ウキミツともいはれてゐる。

日本ニハ、景色ノヨキ處多シ。ソノ中、日本三景ト、近江八景トハ、モ、トモ名高シ。日本三景トハ、松島・嚴島・天橋立ノ景色ヲイヒ、近江八景トハ、勢多・矢走・粟津・石山寺・三井寺・堅田・唐崎・比良峰ノ景色ヲイフ。

先陣

第三課
宇治川ノ先陣

乞

數

源賴朝ノ將士ヲシテ木曾義仲ヲ宇治ニ討タシムルヤ、梶原源太景季、賴朝ニ乞ヒテ曰ク、「今度ノ戰ニハ、景季キツト先陣仕ラン。何トゾ、御名馬ノイケヅキヲ賜ハリタシ。」トサレド、賴朝ハ、何カ思フトコロアリタレバ、スルスミトイフ馬ヲ與ヘタリ。佐々木四郎高綱、後レテ來リ、賴朝ニ申シテ曰ク、「アマリ、急ギテマヰリタレバ、馬、大イニ疲レテ、如何トモイタサレズ。」ト。

濁水。

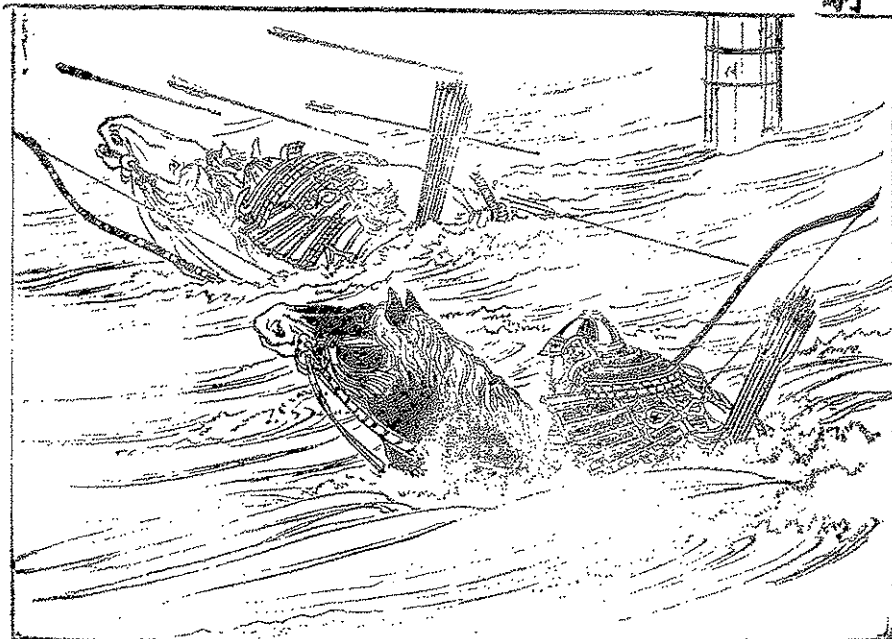
亂杭。

賴朝、コレヲ聞キテ、サラバ、イケヅキヲ與フベシ。汝、コレニ乘リテ、宇治川ノ先陣セヨ。トテ、タダチニヒキ出サシメタリ。高綱ハ、アマリノウレシサニ、涙ヲ流シテ、高綱先陣仕ラズバ、生キテハ歸リ申サズ。ト、勇ミニ勇ンデ出陣シタリ。

時ニ、宇治ノ大川ニハ、濁水、マンマントミナギレリ。義仲ノ軍ハ、橋ヲコボチ、川ノ底ニ亂杭ヲ打チナラベ、大綱小綱ヲ張り流シ、一

一騎

誰



騎モコナタニ渡サジ
ト、弓ヒキシボリテ、待
チ居タリ。

見レバ、小島ヶ崎ヨ
リ、武者一騎、流ヲ亂シ
テ、敵ニ向ヘリ。ソレニ
ツヅキテ、マタ一騎、先
ニハヤラジ。ト乗り出
デタリ。サキナルハ誰

匹

ゾ、梶原ナリ。後ナルハ誰ゾ、佐々木ナリ。イケ
ヅキ、スルスミ、二匹ノ名馬ノ、サカマク波ノ
ソノ中ニ、高クイナナクモ、勇マシヤ。

ヤガテ、一騎ノ武者ハ、大綱、小綱ヲウチ切
リウチ切り、當ル矢先ヲハツシツツ、真一文
字ニウチ向ヒ、岸ヘト馬ヲ乗リ上ゲタリ。ソ
ノ大音聲ニテ名乗ルヲ聞ケバ、佐々木四郎
高綱、先陣仕レリ。ト。

第四課 木曾の谷

沼

崩

信濃の國の御嶽と駒ヶ嶽の間に、長さ二十里の深い谷がある。これが、いはゆる木曾の谷で、谷底を流れる川が、木曾川である。木曾川に沿うて下ると、兩岸がだんだんせまって來て、しまひには、けはしい山腹を崩して、道をつけてある。この道は、木曾の山道といつて、大と一あやふい道であつたが、今は、新道が出來て、車や馬も、自由に通ずるよゝになつた。

絶景。

この道から、うつむいて見ると、谷は、目のまはるほど深く、岩にくだける水の音が、何ともいはれないほどのすごい。かういふ様であるから、木曾路二十里の間には、山水の景色のよい處が、大と一多い。中でも、寢覺の床は、もつとも絶景である。木曾には、また、古跡も少なくはない。そのうちで、木曾義仲の城あしが、一ばん名高い。木曾の山林は、大抵、御料林になつて居る。

檜 この山林は、日本第一の山林であつて、檜さはらあすひねずこーやまきなどの大木が、數里の間に生ひ茂つて居る。

價額 この山林の材木は、毎年、春と秋にきり出し、木曾川へおとして、諸國へ送る。その價額は、年々、數十萬圓に上るといふことである。

木曾には、名所・古跡はなほ多くして、名所には、寢覺の床などあり。古跡には、木曾義仲の城ありとまどあり。

木曾の山林は、日本第一の山林にして、檜さは

不案内

らあすひねずこーやまきなどの大木、しんしんとして、數里の間に生ひ茂れり。

第五課 苗木を注文す

さき頃買ひ入れた山に、檜を植ゑて見たいと存じますから、その苗木を一萬本ほど、至急お送り下さい。檜は、これまで手がありませんので、植ゑ方や手入れ方も、一向不案内でありますゆゑ、ごめんどーでありませうが、くはしく、そのことをお示し

下さい。代金は、苗木の着き次第、おとどけ
申しませう。

十一月十日

山下松藏

林 繁三郎様

返事

このたび、お買ひ入れになった山に、檜を
お植ゑなさるさうで、一萬本の苗木を御
注文下さいまして、ありがたう存じます。
只今、通運便で出しましたゆゑ、三四日の

栽培
覧
運賃

中には、お手に入りますせう。お尋ねの植ゑ
方や手入れ方などは、別紙の檜栽培法で
御覧なされば、おわかりになりますせう。代
金は、荷造り費と運賃を加へて、五拾四圓
貳拾五錢になります。とりあへず、御返事
いたします。

十一月十五日

林繁三郎

山下松藏様

第六課 世わたる業

幽谷。

木曾山中のごとき深山幽谷に住む人の
中には、ふでに綱をつけ、夫は、その中に入り、
妻は、これをつり下げ、引きあげなどして、岩
間の岩罅を取るを業とするものあり。下は
幾丈とも、かぎり知られぬ谷底なれば、もし、
綱の切れたらんには、命なかるべきことも
あろなり。

乳。吞。

權。

また、伊勢の海のあまは、乳吞兒をひき連
れ行き、夫は、船にありて權を使ひ、妻は、海底

求。



に飛び入り、ここか
して、あはび貝を求
むるなり。子の乳を
尋ねて、よよと泣く

聲にひかされて、浮
み出で、ふなばたに
とりつきて乳をと
ふる様、まことにあ



はれなり。

かかる業をなして、すぎはひするものさへあるに、常々家にありて、楽しくその日を過ごすわれ等は、いかに、ありがたきことにあらずや。

世ニ、アハレナ世ワタリマスルモノハ、タクサ
ンアルガ、本曾山中ノ岩茸トリヤ、伊勢ノ海ノア
ハビトリホド、アハレナ世ワタリマスルモノハ、
少ナイデアタウ。

アハビトリハ、深イ森ノ底ニタグリ入り、岩茸

トリハ、ケハシイガケヲ、フゴニ乗ッテオリルノ
デ、ドチラモ、ミナ、命ガケノ仕事デアル。

世ワタリノタメナラ、カヨ―ナコトデモセネ
バナランノニ、ヘイセイ、家ニ居テ、樂ナ暮シタシ
テイル自分タチハ、マコトニ、シアハセナコトト
イハネバナラン。

第七課 わが母

われのこの世に生れがけ

胸にあたため腕にだき

頬をすりつけ頭まで

愛せしは誰どわが母よ

頬 腕

陰

藥

われがねむけのさした時
清き木蔭につれゆきて
子守歌をばうたひつつ
ねかせしは誰どわが母よ
われが病氣になりし時
よるひるとなくつきとひて
醫者よ藥と心をば
いためしは誰どわが母よ
われが遊びてありし時

痛

でんでん太鼓や笙の笛
むしゃ人形や竹馬を
與へしは誰どわが母よ
われがころびて泣きし時
いとぎて痛みをなでたまひ
われの好める物語り
聞かせしは誰どわが母よ
山より高き御めぐみ
海より深き御なさけ

忘

あはれこの世も後の世も

いかで忘れてよかるべき

母上御年老いまして

弱らせたまふことあらば

われ御杖と身をなして

かならずたすけまゐらせん

母上弱くなりたまひ

あづらひたまふことあらば

われ御とばを立ち去らず

かならずすくひまゐらせん

第八課 秋の野山

はげしき暑さは、いつの間にかすぎ去り

て、涼しき風吹き渡り、野山は一面に、おもし

ろき秋の景色となりたり。

すすきは、風になびきて、我等を招くが如

く、をみなへしは、頭を上げて、我等を待つに

似たり。山の木の葉は、もみぢして、松の緑を

まじへ、その美しきこと、繪も及びがたし。

新

詩 本 卷二

高等用

二十五

株式 普及 會館 版

枝細けれど、花の
にぎやかなる野菊
は、細き道のべをか
ざり、色うすけれど、
香のかうばしきふ
ぢばかまは、木蔭に
かをれり。

萩
風にてぼるる萩
の花、葉さへ花さへ



かはゆらしき大和なでしてなど、ここかし
こに咲き亂れたるさまは、すみれたんぽぽ
の咲きみちたる春の野の景色にもまさる
ほどなり。

日暮れて後、銀の如き月の、すみ渡りたる
空にのぼるを見、また、鈴蟲・松蟲・きりぎりす
などの、かなたこなたのくさむらに鳴くを
聞けば、家に歸ることをも忘るるほどなり。
ああ、聞くもの、みな、おもしろきは、秋の野

山なり。ああ、見るもの、みな、おもしろきは、秋の野山なり。

秋は、天氣さわやかに、風涼しくして、人の體に適すれば、運動にも、勉強にも、またとなき好時節なり。

秋の野には、萩・すすき・野菊など、いろいろの草花咲き亂れて、その景色、まことによし。

また、草むらには、鈴蟲・松蟲・きりぎりすなど、さまざまな蟲鳴きて、その聲、はなはだ愛らし。

第九課 果物

果物ニハ種々アルガ、トリワケ、人ノ好シ

柿

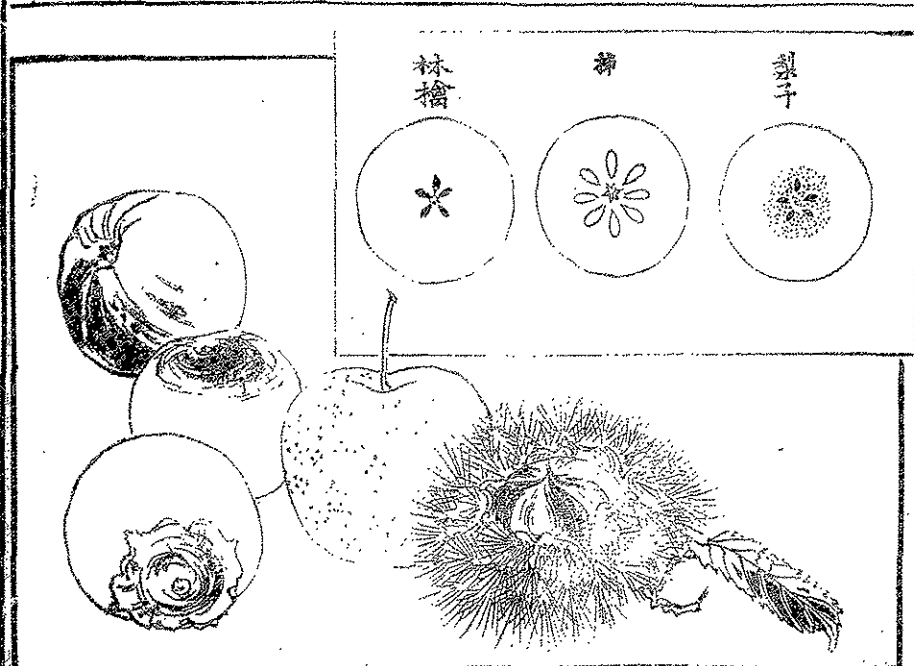
デタベルモノハ、カキ・ナシ・リンゴ・クリナド
デアル。

梨

一。緒

柿ハ、花ハ小サイガ、實ハ、大ソー大キイ。實
ニツイテ居ルヘタハ、花ノ時ニ、ガクトイッ
タモノデアッテ、實ノタペラレルトコロハ、
花ノ心ガ、フクレテ大キクナッタノデアアル。
梨ハ、花ノ時ニハ、ガクガアルガ、實ニナッ
テカラ、ヘタノナイノハ、ナゼデアラウカ。
ソレハ、花ノ心トガクトガ、一緒ニ固マリ

林檎



合ッタユエデアル。
林檎モ、梨ト同ジ
ヨ一十果物デアル。
果物ハ、種ガナイ
ト、タベルニヨカラ
ウニ、ナゼ、アシナモ
ノガアルノデアラ
ウカ。
種ガアレバコソ、

栗

タクサン、ゾノ種類ノ木ガ出来テ、タトヒ、古
イ木ハ枯レヨウトモ、切ラレヨウトモ、果物
ノ木ガ、ナクナッテシマハナイノデアアル。
ソレナラ、栗ニ種ノナイノハ、ドウイフワ
ケデアラウカ。
栗ニハ、大キナ種ガアル、人ノタベル所ハ、
ミナ、種デアル。
味ノヨイ果物ハ、我等モタベルシ、鳥ヤ獸
モタベル。ソレユエ、ゾノ種ガ、遠クハナレタ

處マデ運バレテ、處々方々ニ、同ジ種類ノ木
ガ生エル植物ノフエル次第ヲシラベテ見
レバ、ナント、オモシロイモノデハナイカ。

第十課 女子のたしなみ

女子に大切なものは、その身のたしな
みなり。たとひ、學問・藝術は、人にすぐるとも、
身のたしなみなき女子は、何となく、卑しく
見ゆるものなり。

卑

生れつき、みめよしとも、身のたしなみを

おこたりて、髪をふりみだし、くびすぢなど
にあかをつけ、汚れたる衣服をまとはば、見
る人、たれか、くちをし、思はざらん。

奇麗

恥

又、たとひ、生れつきみめあしとも、身のま
はり、なにとなく奇麗ならば、いかに貴き人
の前に出づとも、恥かしきことなかるべし。
されど、美服をかさね、價たかきかんざし
など、これ見よがしにさしかざりて、ほこり
顔なるが如きは、かへって、身のたしなみな

丁寧

きことを人に示すものと知るべし。

女子は、ものいひ丁寧にして、やさしく、ことば少なにして、しかも、あいきよーあらんことをむねとすべし。かりにも、いつはり、をしり、へつらひ、あざけりなどすべからず。

接

女子は、動作しとやかにして、禮節にかなひ、高ぶらず、また、いぢけず、人に接して、その進退のよろしきを得ることをむねとすべし。

これらのたしなみに、かけたるところなくば、世にはづかしからぬ女子ともなることを得べし。

女子ハ、何ホド學藝ガア、テモ、身ノタシナミカナクテハ、卑シク見エルモノデアアル。ソレユエ、言語ハ、ヤサシク丁寧ニシ動作ハ、シトヤカニシテ、禮節ニカナフヨーニセネバナラン。

マタ、髪ハ、毎朝クシヲ入レ、衣服ハ、シワノヨラヌモノヲ著ルナド、スベテ、身ノマハリハ、セイケツニセネバナラン。

第十一課 紫式部

昔から學問もふかく、徳も高い賢女が、た
くさんありましたが、中でも、紫式部は、また、
かくべつな賢女でありました。
紫式部は、ちひさい時から、大に、物覚え
のよいむすめでありまして、兄が本を讀ん
でゐますと、そばに見てゐて、兄よりもさき
に覺えました。

獨

式部は、不幸にも、早く夫に死に別れて、獨
り身となりましたが、それから、もう、夫を



もたないで、一
心に、二人のむ
すめを育てて
をりました。
そのころ、
一條天皇の中
宮に、上東門院
といふ御方が
あつて、よいお

つき役をおさがしになつて居られました。
ある人が、式部をおすすめ申し上げまし
たところが、さよ—な女子があるなら、早速
召し出せ。と仰せられました。

そのとき、人々は、式部は、あれでも、學問が
出来るのであらうか。だまつてばかり居て、
一こ—物を知らないよ—である。といった
さうであります。それは、そのはず、式部は、む
だぐちなどいふよ—な、卑しい女子ではあ

りませんでした。

式部は、源氏物語といふ書物を著はしま
した。その書物は、作り方といひ、文章といひ、
大と—、おもしろくありました。ゆゑ、かして
くも、一條天皇の御覽にまで上つて、大い
に、おほめをかうむりました。

式部の長女は、大貳、三位といつて、次女は、
辨、局といひました。二人とも、學問もあつた
し、徳も高くありました。ゆゑ、三位は、後一

條天皇の御乳母にあげられ、局は、後冷泉天皇の御乳母にあげられました。

この二人が、かよいなもったいないお役目を仰せつけられたのも、みな、母なる式部のをしへが、よく行きとどいたからであります。

第十二課 松のみさを

月のかつらも手折るべし

ことばの花もかざすべし

桂

つきの桂は手折るとも

言葉の花はかざすとも

しぐれにとまふりつもる

雪にたわまぬ常磐木の

標

松の標をまもらずば

世にたつかひやなからまし

第十三課 宮崎安貞

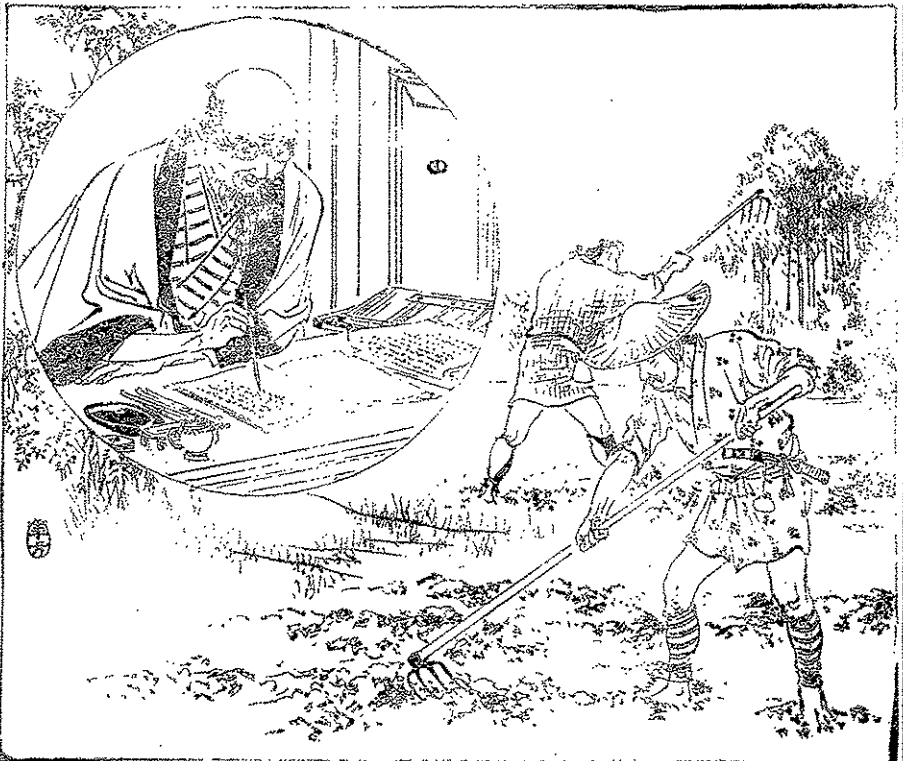
ワガ國ハ、古ヨリ農業ノ開ケタル國ナリ。
コレ、一二ハ、土地氣候ノ、コノ業ニ適シタル

進歩ニモヨレド、一二ハ、昔ノ人ノ、農業ノ進歩ニ
カヲツクシタルニモヨレリ。

農業ノ進歩ニカヲツクシタル人ノ中ニ
モ、名高キハ、宮崎安貞ナリ。

安貞ハ、安藝ノ國廣島ノ人ナリキ。幼キ時、
國ヲ出デテ、筑前ノ國福岡ニイタリ、黒田侯
ニ仕ヘテ、大イニソノ信任ヲ得タリ。

ノチ、諸國ヲメグリテ、フカク農業ノ法ヲ
キハメ、國ニカヘリテヨリハ、ミヅカラ農ヲ



イトナミ、カツ、
村民ヲ導キテ、
農事ノ改良ヲ
ハカルコト數
十年ナリキ。ソ
ノ間、農業ノ新
法ヲ發明シタ
ルコト、ハナハ
ダ多シ。

世ニ名高キ農業全書十卷ハ、安貞が四十餘年ヲ費シ、年八十二近キコロ、ツクリ上ゲタルモノニテ、實ニ、ワガ國農書ノハジメナリトイフ。

宮崎安貞は、農事の改良に大なる功のあつた人であります。安貞は、四十年あまりかかつて、農業全書といふ本をつくりました。この本には、安貞が、農事について發明した新法などが、くはしくのせてあります。

第十四課 名取彦兵衛

現今
輸出

現今、わが國より外國へ輸出する產物中、第一に計へらるるものは、生絲なり。されど、最初の間は、絲の製法不十分なりしたため、外國の信用少なく、その賣れ行きはかばかしからざりき。

憂

その頃、甲斐の國に、名取彦兵衛といふ人ありき。深くこれを憂へ、いかにもして、製絲の法を改め、海外の信用を高めんとし、日夜工夫をこらしたれど、思はしき結果を得ず。

これがために、大いに身代をかたむけたり。
近隣の人々、これを見て、笑はぬものなく、
家族・親類も、しばしば、これを中止せんこと
を勧めたりき。

勸
座繰
乾
されど、彦兵衛は、少しもかへりみず、工夫
に工夫をこらして、つひに、座繰器械、ならび
に、蒸氣にて製繰を乾かすこと、生繰のつや
を増す方法等を發明し、多年の願望を成就
したりき。

羨
これより、わが國の生繰は、品位、大いに高
まり、外國への賣れ行き、にはかに、盛なるに
至れり。

第十五課 買物を頼む

近い中に、京都へ御見物にお出かけなさ
るさうで、まことに、お羨ましいことであ
ります。京都は、織物に名高いところとき
いて居ますゆゑ、珍しいものが、いろいろ
ありませう。それで、一つお願ひがありま

す。外のこともございませんが、どんなか、しゅちんで、私に似あはしい帶地を一本買って来ていただきたいのでござい
ます。あまり上等の物でなくてもよろし
うございますから、なるだけ、この封入の
金高までぐらゐるのをお願い申します。

十二月十六日

草野みどり

春日梅子様

返事

序

お申しこしのこととは、まことに、おやすい
御用でございます。御封入の金は、たしか
に受け取りました私も、西陣で帶地を買
ひたいと思つて居ますゆゑ、その序に、あ
なたによささうな柄を見立てませう。直
段のことは、よくもわかりませんが、大抵、
おつかはしの金で買はれませうと思ひ
ます。いづれ、歸り次第お目にかかつて、い
ろいろとお話しを申し上げませう。

十二月十六日

春日 梅

草野みどり子様

獅子。

第十六課 獅子と兄弟 (一)

むかし、イタリ―國のローマといふ都に、
アンドロクラスといふ丈の高いりっぱな
奴隷男があつた。この男は、不幸にも、奴隷の身分
であつた。

ある日、何かの事から、主人は、大と―立腹
して、アンドロクラスを打ちすゑた。

隠

寐

アンドロクラスは、こんなめにあふ位な
ら、死んだ方がましだ。と、一旦は、思ひつめた
が、また、死ぬには、いつでも死なれる。と考へ
直して、その夜、逃げ出して、森の中に隠れた。
アンドロクラスは、木の實などを食つて、
一日二日は、命をつないでゐたが、と―と―
食ふ物がなくなつて、しかたがないから、あ
る洞穴にはひこんで、食はず飲まずに、寐て
居た。

すると、その入口の前に、何か来たように
あつたゆゑ、とつと、起き上つて見たら、さあ
大變、大きな獅子であつた。

アンドロクラスは、「ああ、もうこれまでだ。
と、覺悟をきめて、じっとして、寐てゐた。

獅子は、のそのと、やつて來たが、案外、飛び
掛りもしないどこかにきずでもあるらし
く、左の前足をさし出して吠える様子が、ど
うやら、助けて下さい。といふように見えた。

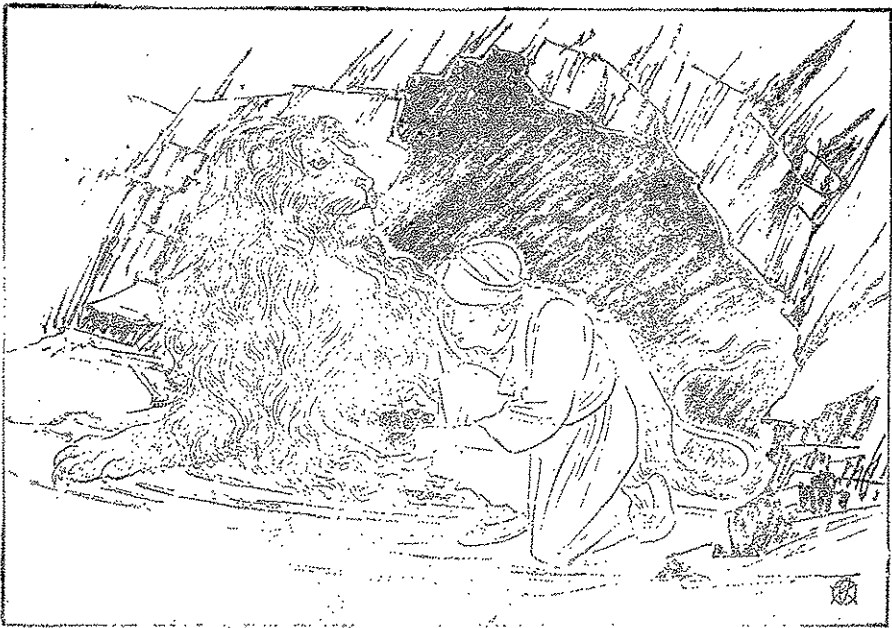
吹

覺悟

飢

アンドロクラス
は、起き上つたが、飢
ゑ果ててゐるゆゑ、
あるけない。やうや
う、はひ寄つて見る
と、獅子の前足に、大
きなとげがたつて
ゐた。

アンドロクラス



伸

は、急にあはれみの心が起って、獅子のお賢者様となつて、そのとげをぬいてやらうとした。獅子は、おとなしく、足を伸して、とげをぬかした。

獅子は、アンドロクラスの手をなめて、犬のよーに、その周圍をまはった。さうして、出ていったかと思ふと、間もなく、鹿の肉をくはへて来て、食へ」といふ様子である。ゆゑ、アンドロクラスは、その肉をたべた。獅子は、う

れしさうに、それを見てゐた。

夜になると、獅子は、洞穴の隅に横になつた。ゆゑ、アンドロクラスも、その側に寐た。

毎日、こんなふーに、獅子のくはへて来る肉をたべては、一處に寐る様子が、まるで、兄弟のよーであつた。

第十七課 獅子と兄弟 (二)

かよーにして、長い間、アンドロクラスは、獅子と兄弟のよーにして、暮して居たが、ど

うしたのか、ある日、獅子は、出たまま、歸つて來ない。

とこで、アンドロクラスは、洞穴から出て、近處をさがしてゐると、後の方で人聲がする。見れば、主人の家の奴隸どもであつた。「やあ、アンドロクラスめ、この間から、さがしてゐるのだ」と、いきなりしばって、つれていった。

情

情を知らぬ舊主人は、ただちに、アンドロ

皆

演戲

クラスを、ろーやに入れておいたが、暫くたつと、大祭日が來たので、アンドロクラスは、演戲に使はれることになった。

どういふ演戲かといへば、獅子と人と戦はせる演戲で、ローマ人は、こんな演戲を見るのを、大に好んだのである。

牢屋

アンドロクラスは、牢屋からひき出されて、演戲場の中に、ただ一人立たされた。とても逃れる術はない。身をふせぐものといつ

ては、兩手があるばかりで、外に、寸鐵もおび
てゐない。

時刻

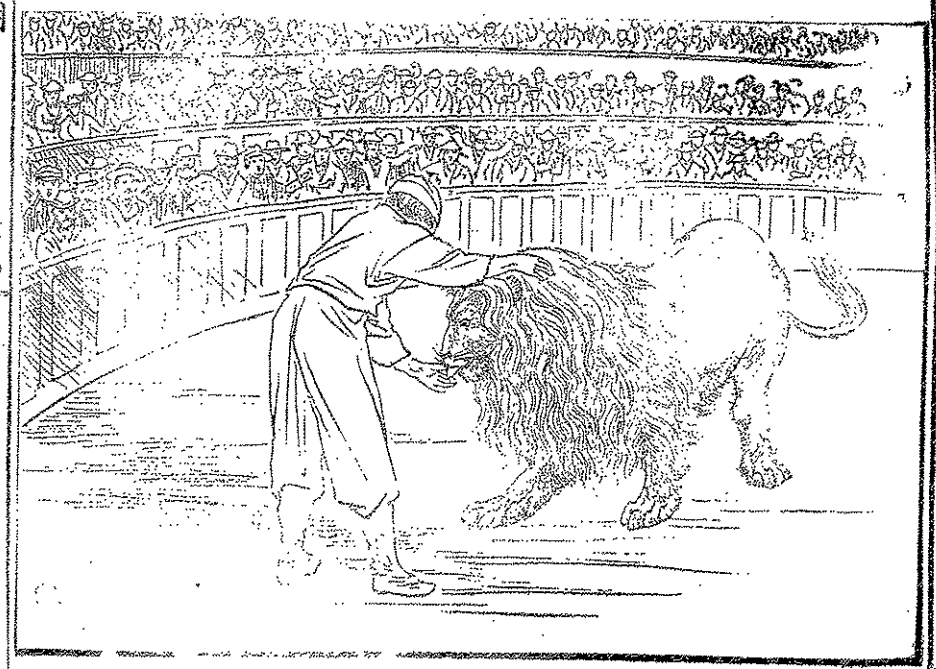
演戯場の周圍には、それを見に來たロ
マの市民が一ばいで、舞臺の片隅には、獅子
をいれたをりがある。時刻が來て、をりを開
くと、さあ、獅子が、をどり出して、アンドロク
ラスを目がけて、とびかかった。

嬉

しかるに、あら不思議や、獅子は、アンドロ
クラスを見て、その前に、びたりと止って、嬉

抱 握

しさうに、傍へ走り
よった。やがて、身を
横たへながら、アン
ドロクラスの手を
なめまはした。
アンドロクラス
も、また、獅子の前足
を握って、獅子の首
を抱いた。それは、と



のはず、アンドロクラスは無二の舊友にめぐりあつたのである。

見物人は、ただぼんやりとして、顔見合せてゐたが、アンドロクラスがそのわけをのべると、一同は歡呼した。演戲は止めとなつた。アンドロクラスは、その場から獅子を連れて出た。

それから、數年の間、アンドロクラスは、この獅子と一しよに、ローマの都に住んでゐ

たといふことである。

アンドロクラスは、ローマの都に住める奴隷なりき。あるとき、演戲につかはれて、獅子に食ひころさるる身となりしが、かつて、洞穴の中にて、はからずも、その獅子を助けたることありしため、その害を免れたりきとぞ。

扇

第十八課 扇ノマト

敗

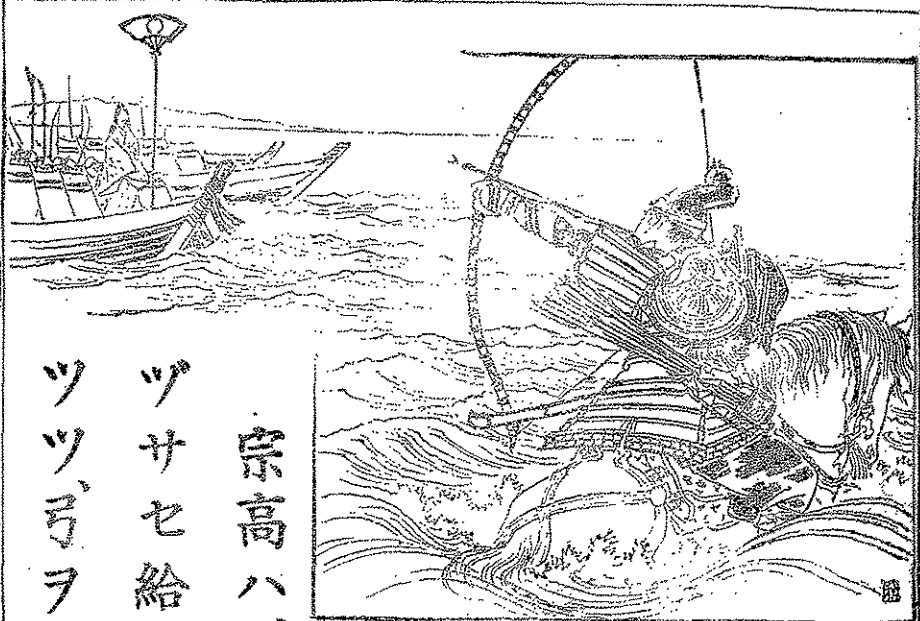
壽永四年二月、源義經、兵ヲヒキヰテ、四國ニ渡リ、ゾノ十七日、急ニ、平家ノ軍ヲ屋島ニ攻メシカバ、平家ノ軍、大イニ敗レテ、ゴトゴ

トク、海ニノガレ出デタリ。

日ノ暮レントスルコロ、一人ノ女子ヲノ
セ、日ノ丸ノ扇ヲ竿ニハサミテ、ヘサキニ立
テタル一艘ノ船、沖ノ方ヨリコギ來リ、コノ
扇ヲ射ヨ。トテ、源氏ノ方ヲウチマネケリ。
ヤガテ、タクマシキ馬ニノリ、弓ヲモチタ
ル一人ノ武者、シヅシヅト、波ノ中ニ進ミ出
デタリ。コレ、那須與一宗高ガ、大將義經ノ命
ニヨリテ、扇ヲ射ントスルナリ。

竿 射

閉



ヲリシモ、北風吹キ
起リ、船ユリ動キテ、扇
ノ位置定マラザリケ
レバ、敵モミカタモ、ナ
リヲシヅメテ、デギハ
イカニト、見守リタリ。
宗高ハ、目ヲ閉ヂテ、コノ矢ハ
ツサセ給フナ。ト、心ニ神ヲ念ジ
ツツ、弓ヲ滿月ノ如クヒキシボ

弦音。

リ、弦音高ク射タリシニ、ネラヒ過タズ、ソノ矢、扇ノ要ニアタリケレバ、扇ハ、ヒラヒラト空ニ舞ヒ上リタリ。

敵モミカタモ、コレヲ見テ、射タリヤ射タリ。ト、エビラヲウチ、フナバタヲタタキ、ホメハヤス聲、シバシガホドハ止マザリケリ。

第十九課 英主海神を叱す

昔、デンマークノールウェー・イングランドの三國に君たりしかニエートといふ王

迷

ありけり。當時、王の宮中には、多くの惡しき臣ありて、王にへつらひたりしかど、王は、少しも、その言葉に迷はされず、かへりて、これをかたはらいたく思はれ居たり。

威光。

ある日、王は、近臣をつれて、海岸を散歩したまひき。この時、近臣等は、口を極めて、王の威光と功德とをほめたて、はては、天地間の萬事萬物、わが王の御意に従はぬものとはなし。とまで、いひ出でけり。

證據

王は、これを聞きとがめて、いかなる證據ありて、かくは、いふど。と、のたまひければ、近臣等は、口をとろへて、心なき波すら、御意のまにまに動き候。と申し上げけり。

王は、かかるへつらひことばに對して、かれこれいふも、無益なりと思召され、しばらくは、何とも仰せられず、波打ちぎはに椅子をおかせて、近臣と共に、休息したまひき。

やがて、王は、居丈高になりて、海に向ひ、一

椅子。

朕聲高く、汝、海神、速に、潮を退けよ。潮もし、朕が足ををかさば、朕、汝に、嚴罰を與へん。と叫び

給ひければ、近臣等は、これを聞き、互に、顔を見合せて、へつらひを信ずる王の愚さよ。と、心の中に笑ひ居けり。

しばしが程に、潮は、次第に満ち來りて、王をはじめ、近臣等の脛をひたすに至りき。

この時、王は、しづかに、椅子を離れて、近臣等に向ひ、いかに、汝等、朕が威光は、かくの如

言ヲノベルノヲ、大ツ、ニクンデヲラレマシタ。
アル時、近臣ヲツレテ、海岸ヲ散歩セラレマシタ
カ、ソノヲリ、ワザト、海神ヲ叱ツテ、ソレトナク、近
臣ノヘツラヒ言アイマシムラレタトイフコト
デアリマス。

蘇軾合說反

荷車ヒキハ、驚イテ、車ヲ引キ止メヨウト
シタガ、止マルドコロカ、カヘツテ、ハネトバ
サレ、積荷ハ、ヒツクリ返リ、車ハ、サンザンニ
碎ケテシマツタ。

押 碎

學問は坂に車を押すごとし

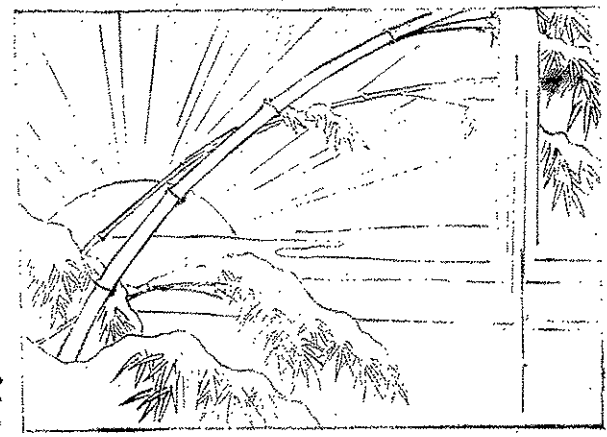
油斷をすれば後へ戻ると

雪ガ、夕方カラ、チラチラト降り出シテ、明
ケ方マデ降りツツケタ。野ヲモ山ヲモ、ミナ、

己

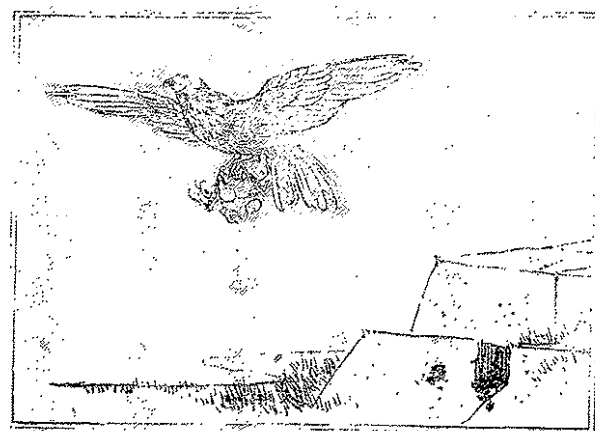
己ノモノダトイハヌバカ
リニ、降りウヅメテ、アクル
朝ニハ、見渡ス限り、一面ノ
銀世界トシタ。

ソノ時、竹ハ、雪ニ頭ヲ押
シツケラレナガラ、ジツト



辛抱。辛抱シテ居タ。ソノ中ニ、朝日が出タユエ、雪
ハ、ダンダン消エテ、竹ハ、モトノ姿ニ立チナ
ホツタ。

たふされた竹はおのづと起き上り
たふした雪はきえてあとなし



河岸ノ石ガキノ中ニス
ンデ居ル蟹ガ、我ハ、堅イ甲
ガアッテ、體モ丈夫デア
ル。ソノ上ニ、銃イ銃ヲ持
ッテ居ルユエ、世ノ中ニ、恐
ロシイモノハ、一ツモナ
イ。ソレ

蟹 銃

ニ、コンナ暗イ處ニス
ンデ居ルノハ、實ニ、バ
カラシイコトデア
ル。ドレ、コレカラ、廣
イ世
界ヲ巡ッテ見ヨ
ウ。ト、眼ヲキョ
ロツカセテ、
ノソノソト、岸ノ上
ニハヒ上ッ
タ。

鳥 虚空。

スルト、傍ノ松ノ枝ニ
居タ鳥ガ、早速、コレ
ヲヒッサラッテ、虚空
ハルカニ、舞ヒ上ッ
タ。

みのほどを忘れて穴を出てし蟹は
鳥のゑじきとなりけるかな

第二十一課 昔の旅と今の旅

一人の老人あり、ある時、子供をあつめて次の話しをなせり。

脚

「汝等の見る如く、われは、いま、かく年老いたれど、若かりし時には、脚も丈夫にて、京都と東京との間をば、幾度か、往來せしことありきいざ、今より、その旅の物語りせん。

京都と東京との距離は、百三十里にて、その間には、五十三つぎとて、數多の宿驛あり朝には、日とともに出て、夜ごとに變る宿

遇

をたづねて、十餘日を重ね、ある時は、けはしき坂路をよぢ、ある時は、おどろしき山賊に遇ひ、ある時は、雨に降りこめられ、ある時は、川どめにあふなど、その難儀いふべからず。されば、家を出づる時は、ふたたび、相見ること、も、かなはざらんよゝに思ひて、家族一同、別れの杯を、くみかはすが常なりき。

然るに、この春、用事ありて、東京にゆかんとし、朝早く汽車に乗り込み、その日の中に、

(一) 本社出版の書籍は専ら堅牢ならんことを期し常に紙質を撰び調製に注意致し居り候へども多數の中或は粗製のものなしたとも申しかね候。萬一かくの如きものこれあり候はば御手數ながら御注意を煩はしたく候然る上は必ず無代價にて堅牢なるものと御引換申すべく候。

(二) 本社出版の書籍はいかなる僻遠の地方にありても定價を超過して賣り捌かしむることこれなく候。もしこれに相違の事實御發見相成り候はば御一報下されなく候。

(三) 本社出版の書籍は本社へ直接御註文の分に限り書籍部數の多少に係らずその運賃の悉皆を本社にて負擔いたすべく候。

